

新刊紹介

九八(KKD)

展のプロセスを、当時の様々なキリスト教文書の記述から、たどっている。第八章では、ローマ帝国におけるキリスト教の普及について論じている。キリスト教は三世紀頃までは「く少數の集団にすぎず、各地の教会も主として都市域に限定されていたが、三世紀以後、教会は田園地域にまで進出した。また帝国領域を越えた伝道活動が盛んになつたが、これらの動きは、三世紀以後のローマ帝国の混乱や社会不安、都市の衰退と田園との格差の縮小傾向などを歴史的背景としている。第九章では、まず古代末期におけるキリスト教の意義について、キリスト教独自の倫理観や価値観の役割を強調するP・ブラウンの説が紹介され、次いでローマ社会におけるキリスト教観の問題が改めて取り上げられ、ローマ帝国におけるキリスト教の歴史は、キリスト教をめぐる様々な「矛盾の併存」の中で展開していくた、と結論づけられる。

全体として、中庸でバランスのとれた記述で、学問的に高度な内容について、分かりやすく、且つ興味深い説明がなされてい。ただ評者としては、序論で取り上げら

れていた、従来のイエス研究で軽視される傾向があつた「復活」やそれに関連する終末の問題、さらに歴史学と他分野との学問的連携の問題について、もう少し深く論じてほしかったとも思う。これらの問題については、松本氏の今後の業績に期待したい。

最後に二つほど疑問点をあげたい。

①四〇頁一〇行目「律法主義者パウロ」について、パウロはどのような意味で「律法主義者」なのだろうか。

②一一七頁五行目に「十一使徒の一人バルナバ」とあるが、一般的にバルナバは、「十一使徒」には含まれないのではないか。

(島 創平)

ポール・ズムトール著／鎌田博夫訳
『世界の尺度——中世における空間の表象——』

(叢書・ウニベルシタス 795)

法政大学出版局 1100円・10刊
四六 五〇一頁 五六〇〇円

原著は一九九三年に、パリのスイユ社か五世紀にかけての中世社会における、歴史

ら出版されている。一九一五年生まれの著者は、メルランに関する研究で博士号を取得し、アムステルダム大学を皮切りに、パリ大学、イエール大学で教鞭をとり、最終的にはカナダのモントリオール大学にポストを得た。一九九五年に逝去するが、その八十年にわたる生涯において五十を超える著書ヒーブを超える論文を公刊している(<http://www.fondspaulzumthor.umontreal.ca/>)。狭義の中世文学界隈以外でもその名の知られる中世学者であり、とりわけ中世社会における声と文字の関係について論じた研究(Paul Zumthor, *La lettre et la voix. De la littérature médiévale.* Paris 1987)は、社会言語学者のM. H. ル・バリトールの大著(Michel Bannier, *Viva voce. Communication écrite et communication orale du IV^e au IX^e siècle en Occident latin.* Paris 1992)と並んで、歴史世界における音声の役割に関する心をもつ歴史家にとっても示唆あるむしろ大きい必読書となつてゐる。

本書は、中世、とりわけ十一世紀から十

史料上に現れた空間表象の研究である。序論では、こうした空間表象へのアプローチ手法と対象の限定を明記し、それに続く貢献で展開される具体的な分析に共通した枠を与えることで、方法論的妥当性を担保している。第一部「居住地」では、家屋、宗教施設、城砦といった具体的な生活施設、そしてそのような施設を取り巻く農村や都市といった定住空間に光を当てる。第二部「騎行」では、地域から地域への旅、巡礼と十字軍、そして騎士の遍歴という空間移動を取り上げ、定住地を離れる人間の活動を扱う。第三部「発見」では、宇宙論といふ地表外の世界、辺境や大西洋の彼方といふキリスト教ヨーロッパ外の世界、怪物や驚異といった想像的世界、至福千年後や彼岸という死後の世界といった、人間の経験的知を凌駕する空間を扱う。歴史学でいえばジャック・ルゴフらが試掘した中世的イメージネールの研究であり、中世における認識空間の拡大という点で、最も興味深い箇所である。最後の第四部「形象化されたもの」は、物語、旅行記、地図、写本挿絵、彫刻といった空間表象を見出すことのでき

る具体的な作品を正面から取り上げ、一種の史料論の様相を呈する。以上のような内容を持つだけに、著者の狭義の専門である文學だけではなく、歴史学、地図学、神学、美術史学の成果もあちこちに援用され、学際的中世学のひとつ模範例である。各所で披瀝された著者一流の指摘は、近年急速に増えてきた中世考古学者による定住空間研究と組み合わることによって、さらに興味深い考察結果が期待される。このような専門性の高い研究が日本語で読めるという幸運を、出版社と訳者の尽力により、われわれは手にしたのである。

以上紹介したように、本書は野心的であ

ると同時に、今後とも読み継がれるべき名著である。しかしながら、翻訳のあり方に

徳井淑子著

『色で読む中世ヨーロッパ』

(講談社選書メチエ 364)

講談社

二〇〇六・六刊

四六 一二四六頁 一七〇〇円

ザーヌスのこと)が同一書籍の中でも存するか)、プレスター・ジョンを「ジャン師」(二六七頁他)、イムラヴァを「イムラーム」(三一七頁)とする専門用語の定訳の無視、

ブレーメンのアダムに「司教」を冠したり(二五四頁他)、シャルルマーニュにわざわざ「大帝」をつけたり(二九三頁)といったような初步的な事実誤認は、大学院レベルの若手が一度訳文に目を通すだけで避けられることができたはずである。訳者の誤解を解き、読みやすい訳文を読書界に届けるための調整は編集者の仕事であるように思うのだが、これは求めすぎであろうか。

(小澤 実)

中世ヨーロッパは「色彩文明」であった。モノクロの近代とは対照的なカラフルな服